上田秋成連句集

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4702

上田秋成連句集

石川真弘編

一、本連句集は、刊本俳書及び真蹟・写本等の資料に所見の秋成一座の連句作品を可能な限り採録したものである。

一、連句各巻の配列編成は、原則として出典俳書の刊行年次、或いは真蹟・写本等の染筆年次に従った。

一、翻字に当り、破損・虫損等で判読不能な箇所は□印で示し、推読可能な場合は、その文字を（　）に付して傍注した。

一、漢字は原則として可能な限り現行の漢字を用い、仮名は特別な場合を除いて平仮名に統一し、私意により濁点を施した。

一、本連句集の末尾に、資料所在の便を計り、連句典拠書目を添えた。

目次

一、「我宿を」付合（宝暦三年）
二、「風限り」歌仙（宝暦三年）
三、「□筆は」付合（宝暦三年）
四、「雲淋し」歌仙（宝暦五年）
五、「是や此」歌仙（宝暦五年）
六、「煤掃の」歌仙（宝暦八年）
七、「樟脳も」歌仙（宝暦九年以降）
八、「斬すてし」歌仙（宝暦十二年）
九、「鐘冴る」百韻（宝暦十三年）
十、「蝶鳥の」百韻（明和七年）
十一、「稀人や」歌仙（明和七年）
十二、「芽を出して」七十二候（明和七年）
十三、「子たる人」歌仙（安永二年）
十四、「いざさらば」歌仙（安永二年）
十五、「よしみの笛」付合（安永八年）
十六、「まれ人に」付合（寛政三年）
十七、「鶏を」付合（享和二年）

一、「我宿を」　（三ッ物、宝暦三年）

元年（住吉社参神鵲を得たり）

我宿を飾らばや神の大柑子　　宋中孝　莫窕

霞をはじめ鈴も振初　　漁焉

干鱈箱城の御門へ擔はせて　　秋藁

（紹廉編『歳旦帖』）

二、「風限り」　（歌仙、宝暦三年）

歌僊

風限り水ある迄も落葉哉　　仝（漁焉）　獨吟

日に憔「顔たる山茶花の色

碁将棋は胸の中から手を出して

更て締らぬ物は相談

けふの月町は至らぬ隈だらけ

煮らるゝ雁の声を香に換へ

ウ柴を炷く二階しばらく霧の海

埃の浮し風呂へ入相

旅へ出て□□□（兜ノ）□等さ

あら美しや扨人でなし

尤なだましやうにて腹が立

泣て居るのは皆贔負組

夜芝居に成り下ッたる奈良の京

障らば伐ん冬の三ヶ月

柄「酌の首引こ抜たる厚氷

毒なき證拠手帋横柄

根をしめる葉にて立花は長となる

針金もまた糸遊ふの中

名うなるには□（担）すうめきし御忌の鐘

小女郎一人に被き大勢

云分ヶを仕ても□□白眼付け

手を握らすも財賦の中

工合能き鋏の音も□（舌）づ、□（み）

草の宿□□牡丹芍薬

裸身のもやうに□（松）を夏の月

酒で肥たも豕といふらん

分銅の菊「石されども行義能き

むかしのあはれ者は神さま

更渡り座頭も乙でさわぎ哥

大振舞は素湯に飢へる

君が代の十人力は恋にあり

向ふ矢先も抱付れては

同「音に寺子の声を雨あられ

蝉の小川に乞食を蒔

初花はちやと開てちやと散る

□□見や□（飛込）燕家探し（る）

（紹廉編『歳旦帖』）

三、「□筆は」　（三ッ物、宝暦三年）

歳旦

□筆は梅に試め民の春　青嶂
今年男が祝ふ稲の穂　漁焉
下町は三月比の名と見えて　秋蘂

（紹廉編『歳旦帖』）

四、「雲淋し」　（歌仙、宝暦五年）

歌僊

雲淋し冬はあらはに北の山　漁焉
寒くも兀て残りたる月　茶雷
なぐり葺弟子に釘飡ひこぼさせて　周禾
隣の蔵がうん〳〵といふ　仝
碓の無息にひとつ仕舞口　漁焉
水の早さに闇うなる松　仝
籠耳の底に何やら翌を待　周禾
書ぬ卒都婆も裏を究る　仝
転で来てつまみ洗ひも坂の茶屋　漁焉
気が付て去ぬ田から暮初　仝
いきついて昇れる仲居さゝほうさ　周禾
逢ては別れ迄を規矩合　漁焉
濡身干烏の散す城の花　仝

椿の蒼背中合せに　仝
綾取の高う投るも春の空　周禾
鶏で焚飯も染もの　仝
月にすゞみ七日の山の宵餝　仝
名ある灯籠の石の長生　漁焉
退屈のいつ下りたやら尻からげ　仝
温泉口の禮の肝へさし付　周禾
棟上の扇のしばる朝嵐　仝
巨燵で人の知らぬ慇懃　漁焉
冬深く木曽路の果の古小判　周禾
さし出の守は諸太夫に有　仝
手盥の底をぬらくら蝕の影　漁焉
荒鷹の眼の頬へらへ明　仝
左右藪杖する竹輿もひいやりと　仝
はだしで猪名野足が切れふぞ　周禾
膝直し果た坐敷を掃て居る　周禾
妾の衣裳染て来る着る　仝
寄生は雨より外の業でなし　漁焉
犬が噛だか社檀から血り　仝
浪人の形其後数右衛門　周禾
小さい坐頭通る朝の間　漁焉
花の道栞〳〵ぞ五文台　周禾
声なくもぐし〳〵と蛙子　仝

（『俳諧十六日』）

五、「是や此」　（歌仙、宝暦五年）

神山の千代にさかゆる榊もてつくれる杖も、君がためとぞ、
為家卿、年の賀に送り給へる古哥を探りて、師翁が八旬の賀を
寿ぐ

是や此年を継尾の鷹頭巾　舞雪
百寿のながめ分る菊の根　呼山
春の山のらりくらりの鐘鳴りて　轍水
門ト（ト）て扇を替て別る、　漁焉
礒はたへ打上られし三日の月　山
青瓢箪が夕寐なんだ　雪
何祝ふ芋茎の膾音もなし　焉
まだ生娘の背中真直　水
編笠（ウ）に両手をかけて楽家入　雪
はじめの戸帳赤地の金襴　山
菓子屋へも小判の通ふ松の風　水
二大名が川を灯にする　焉
土産物雨の用意で引包み　山
山椒の芽喰た息のつめたさ　水
花迄を公事根源のあらこなし　焉
朧月夜は加茂の海原　水
銭湯の布子の上に珠数を置　雪
変化はしても牽頭放れず　山
二階口追かけて来て咽きぬ　水
余所はうす暮鶏ゝ蒙蚊帳釣る　焉
米市で一寸の雲見付出し　山
清水の木立すらり〳〵と　雪
竹輿舁はうかめたやうに声をかけ　雪
四社をまはって砂払ふ膝　焉、
式台の青石よりぞ時雨して　水
笑ふた涙口上を聞く　山
仇惚かそしりはしりにによつき〳〵　雪
日和をかたう見せる稲妻　焉
宗論に千人剃て明の月　山
蛤になる雀小盗み　雪
いつ（ナウ）去んだ挨拶なしの荷ひ台　焉
巾イてかさねる枕くづれる　水
たばこ呑む検校横に請答へ　雪
一代限りの松を植込　山
水引の結んだ形りも花にして　水
蝶のいさみの晴る日を呼　山

（『うたゝね　藤』）

六、「煤掃の」　（歌仙、宝暦八年）

歌仙

煤掃の風が吹なり更衣　　馬
　日の根本は麦の空色　　山
大木の腎のあたりはうとろにて　　馬
　淋しい耳をすつきりと拭く　　圭
山の月またいき〳〵と二三尺　　、
　はや品かはる鹿の足取　　山
ふく綿のほめきとらる、川の音（ウ）　　、
　遊女すた〳〵手拭を縄　　馬
立て通す筋が間違ひ産てのけ　　馬
　枕抛り過ぎしんどさしをる　　圭
暖簾に菴号書て鞠の音　　山
　一ところ這ふ滝の近道　　圭
関取の背中へ人を飛つかせ　　馬
　十間先の式台の月　　、
入相がはじめて扇忘れさす　　圭
　御舟に橋を追れつくばふ　　馬
咲揃ひ見馴し花のよそ〳〵し　　山
　いたづらもの、春はうつかり　　山
頼（余）ましよが直に勒（ママ）て美しき　　圭
　脱た浴衣へ手帋失ふ　　、
白雨の先へ〳〵と植て行　　山
　奈良は禁中さまのぬけ売　　圭
神前の畳四方の日があたる　　馬
　鳶に蹴られて落る付鬢　　山
明六をまだるく思ふ小百姓　　馬
　心中へはじる帯解けて有　　圭
あちらへも土盞が行と高笑ひ　　、
　一度は喰ふて廻るどんたい　　山
寒月に咽て居る鯉と鮒　　、
　へろ〳〵屋しき家礼三人　　馬
僧正（波）と対坐互に軽〳〵し　　馬
　よい身躰の今度も堪忍　　圭
折形の手際は若う思はれて　　山
　入日のむまい大の晦日　　馬
旅の花肩へ羽織のかけ所　　圭
　燕の宿の五丁三丁　　山

（『はなしあいて』）

七、「樟脳も」　（歌仙　宝暦九年）

亀文の追善集の歌仙

歳暮

樟脳もいつしか皆にとしの友　　亀文
　枯れても匂ふ寒菊の土　　漁焉
阿弥陀堂かゝる時にや泌るらん　　亜覧
　ひとり堀れたる山本の井戸　　、

団ほど風ももたいで月の藪　焉
　鵠寄麗に蒹埃たて　〃
ウ大鷹の雛ははゝだに書費し　覽
　居てつくる帯の結目　〃
憂ことを訪ふて呉れるは煙屮の火　焉
　下手三味線で淋しがる雨　〃
材木より絵具の多く入普請　覽
　野分に泥の飛た白壁　焉
袷着て二百十日の舌鼓　〃
　月夜も闇も乞食早う寝　覽
御託宣神の勝手な事ばかり　〃
　酒を利にも耳を傾け　〃
邪广に成るものと思へど共の供　〃
　暮天の蝶の挑灯を吸ふ　〃
二雷もはじめて鳴るは快き　〃
　帷子縞が今の世を知り　〃
先生のめつそう誉てはまり込み　〃
　鯰とる火の艸にちよろつく　〃
松風も大破〳〵と吹わたり　〃
　前巾着のひざまづきやう　〃
陸奥の国芝居の株は無いそうな　〃
　蝸牛の角を撮んでも見る　〃
拍子木を打合したる塀の月　〃

　鼻にぶらつく出がはりの嘘　焉
紅絹無垢は箪笥でさめて菊節句　〃
　影絵の種を禿見て来る　焉
ウ鉢巻は横にするのがいさぎよき　覽
　船焼て居る雨後の砂つぱ　〃
昼の鐘いつ撞たやらしれぬ也　〃
　軽うはたらく見せ菓子の箸　〃
筆塚も築べき地には花の雪　焉
　斯もあろうと雲に入る鳥　〃
亡主、歳末の句を右にして、六々の員に足して香筆にかゆ　覽
（『亀文追善集』）

八、「斬すてし」　（歌仙　宝暦十一年）
十月十四日　一翁院
小祥忌爪合

斬すてし腕にたばしる霰かな　焉
　何十棒にちから草咲　〃
啼かはす雪の鴉の声濡れて　〃
　さつても黒し大こく柱　〃
見あぐれば松に風なし夏の月　覽
　あちらの橋を我迎ひゆく　〃
辻までは並んで来たる駕は減り　〃
　京もはじめて神鳴にこり　〃

執筆　蟻十
　　笛十
　　漁焉
　　晴川
　　呼山
　　海谷
　　柳吟

奥の間へ一人寐に行者がない　五棟
　野末の宮の楊弓の音　馬州
講尺にのつたところで涕をがみ　其答
　そろへぬうちは芹も塵塚　冬札
順礼と花と見るにもあとや先　馬竹
　葛城さむしどこにさほ姫
明くれにおやま絵さへも年よりて
　今霄産ふもしれず月見る
秋風に波ある池のしんとさせ
　茸がりが来て吹おろす砂
牛追て戻つてけふの触を開く
　二代は生ず気ま、ほう薬
一丁へ木葉をちらす下屋敷
　奉公のぞむ契の水ぎは
女には希なところの思ひきり
　あまい薬のあはぬさつくり
撃に出る楽屋しばらく節季にて
　はやり稲荷の跡で尾が見よ
夕立に肩を脱たるあつみ山
　けふは遊行で野に人はない
出る月の下に清水はわき上り
　艸いつき〳〵露のうす暮
津国へ入れば新酒の匂ひして
　くるりと渦をまはす居風呂
吹よせたやうに床几に腰をかけ
　になひ台先見かへつてゆく
懸物も香のけぶりの花がたみ
　へだ、る月日八重がすむ空

（舞雪編『雪達摩』）

鬼盈　渭橋　烏角　舞巾　五百魚　蛙多　汝洞　庫山　化兵　三冬　釜調　魚交　双波　大路　露所　徐道　杉丸　季東　飛仙　臥桂　魯谷　呂圭　序風

九、「鐘冴る」　（百韻　宝暦十三年）

一翁院紹蓮大祥忌追悼
　百韻
　諸抄を探るは、其規矩にもとづくの導き也。それを導くは師也。
　されば翁が書つかねし文の数〳〵、ふんでの雫の梵に入て、
　船をあぐるいさをしも、けふやかたみとはなりぬ　舞雪
鐘冴る夜や幻にたちつてと　売総
　目も沫雪をあまんずる舌　五百魚
家の風京わらんべもはやすらん　漁焉
　放下の莚市へつゞけり　芹生
か、る代を延喜何年刈入れて　季東
　名月をよけてゆく雨つぎ　海谷
礫うつ鮎のかたまり秋もや、　執筆
　蒲団は肩に駕たばこ盆　呼山
振袖に隠居よつてり寄か、り　大路
　わる口いひの憂名たつらん

俳諧に八代集は芭蕉まで　洒郎
商人種は伊勢美濃路から　笛十
千両の井戸堀すなり通り町　烏角
秋の塞下に鷹の尾の鈴　如藍
裏も猶照ます鏡ふた夜月　呂知久
相撲会果て社家のかし傘　舞巾
おづ〳〵と肴にすはる小百姓　季東
機にたすきは女武者ぶり　海谷
うち見にははすはながらも咄しよき　大路
涼みの夜店むしたてる雲　芹生
三伏に鱸の口の花が咲く　売総
あつと感ずる斑白の使者　舞雪
三甲陽軍鑑とらぬありとるもあり　笛十
よかろ〳〵と旅籠にも蕎麦　五百魚
殺生の戯悔がたりに月おぼろ　漁焉
禁制桜老にけらしな　烏角
しよろ〳〵と水は流れて春深し　如藍
寡夫の職が狂哥横好　呂知久
お若衆の草履なをすも有がたき　舞巾
油壺から出現の像　洒郎
梅雨じめり亡八の緩簾縄によれ　舞雪
ちから車におせや飯次　大路
さい槌あたま大工とはうまれつき　烏角

榾にふすぼる横川西塔　笛十
二三人本草しりの山めぐり　五百魚
おれもこれをと朱鞘芝引　季東
二ウ関東の文にはいつも一歩づゝ　洒郎
娘をみがく母も黒髪　如藍
かゝれとてしも揚詰に鼻明て　海谷
朝寐の膳を飛ちがふ蝿　漁焉
木づくりの見て戴し銀ぎせる　呂知久
あはれ堺に漢人の胤　売総
切くだく羅紗の費も菱の餅　芹生
戸明たところ清明の空　舞巾
物よろこびか花嫁に座をあたへ　海谷
咡かれつゝわなゝく〳〵　五百魚
郭公廊下の板のすり合せ　大路
ふんばたる唐櫃のそと鰐　呂知久
宮城野が原半月の鎌入れて　烏角
轡づら虫佩た藤柄　漁焉
三木兎の頭巾に老やつくるらん　笛十
役者やめてのけふが出はじめ　如藍
江戸もたゞ上方ぶしのはやる世に　季東
太鼓でん〳〵坂迎ひ舟　芹生
読書も男まさりの後家主　舞雪
夜あるき誘ふ隙の駒づれ　洒郎

中宿の箪笥にほめく二ッ紋　売総
こゝを見たかとかゑす田一楽　舞巾
鴛の来る池に蘭塔朝の月　如藍
梅津の流し松の尾を心ゞ　笛十
ふしくれし足を木挽のさし向ひ　芹生
てゝらに二布蚊遣り火の影　舞雪
それかとも夕顔見えぬ妾もの　漁焉
按摩仏法医者は幇一間　烏角
三ウどうなりと縮緬ばゝの望むまゝ　呂知久
異名合点であほう忠臣　季東
何とりゑ茗荷のさし味香もなくて　酒郎
二三りん吹く花のまつ昼　大路
見にやならぬ春を見に来ぬ金竜寺　五百魚
庄屋へ手紙持て渕釣る　海谷
侍の貧乏形気真似さへも　売総
馴衣ひた〳〵と裾掃く　舞巾
傾城の昼は五衰をあらはして　笛十
けふの茶の湯も金につもられ　如藍
さりとては畳の赤き借座敷　舞雪
神のわやくで難波から舁く　芹生
春秋を売て着がへて胸の月　酒郎
産と泣く独り喫み次の間　五百魚
ナこらしめと出店に三とせさすらへる　海谷

さめる浮気も水の落口　呂知久
石山の石に燧ッ水は螢谷　季東
鯉わたるらん鮮のぬたのた　売総
腹病の戴く丸子呑こぼし　大路
兄弟あはれ弟に不便さ　舞巾
常盤御の使も馬に鞍馬寺　漁焉
見とるゝばかり色かえぬ松　烏角
臥待の寝入ば鼻をつまゝれて　舞巾
躍りの世話も黒羽印籠　芹生
ごそ〳〵と部屋の男の漆まげ　売総
身の上問れ馴染む髪結　海谷
かいた恥古ふんどしの夜這星　呂知久
来るとうるさいとむかし潜上　酒郎
ウとばかりの鰹膾もたのみあり　五百魚
昼一いきを旅の手枕　如藍
土手土橋城下をめぐる川の音　舞雪
仰向く空は几巾蒔た空　烏角
戻る雲雀や立雲雀笑ふらん　季東
躑躅に含む夜に降る雨　大路
咲を見よ泰山府君花の恩　笛十
今放ちたる魚遊ぶ春　漁焉

（舞雪編『さし柳』）

十　「蝶鳥の」　（百韻　明和七年）

賀古稀

蝶鳥の米てなぐさめる老木哉　舞雪
　手の舞足の踏どころ春　漁焉
遠近も君が代風の麗に　五百魚
　一月に見れば餘る大舟　売総
街道のすぐ小坐敷の片折戸　汝洞
　何ぞ聞たか鳶の立やう　樗艾
竹刀はりう〳〵空に月の弓　庫山
　萩はうなづき松が答える　呂雄
秋祭りなれば御堂も楫を絶　斧三
　すまたから出た近年の出来　青芽
忍路を半丁除て供廻り　栢山
　抱つく逃る家鴨ギャア〳〵　迁喬
百万も張紙迄は気が付ず　藤士
　撃こむ太鼓腹はさゞ浪　季東
湖の眉に多景嶋竹生しま　吏外
　蘓鉄隠れに残る月影　松卦
堅意地な狐の科を秋の庭　虎岳
　鳴子の音に小鳥羽叩　水馬
桧笠道わけ石を神にして　飛山
　清水へ近く物音かすむ　曳尾
谷〳〵の花見るための羊腸　布由

竹輿も鉤せで春を我まゝ　指嫦
ほろゝ打雉子の舌へ朝日さす　草満
　咄の届く川も仮橋　布洗
絵図にあるほどは目立ぬ国境　貫道
　山貫きし順礼の鉦　五百涛
郭公宰予が夢を引破り　風宣
　風を待にも掃て水打　維菊
栖には又不自由ある岨の庵　一邦
　一葉の内に踊催す　烏角
出る月を待す名所の手柄にて　真丸
　聞人あるとも知らず礒は　草満
化物の外にはあらじ髪かたち　舞巾
　可笑がらるゝ新枕沙汰　渦外
異見聞耳は持ぬと厚氷　臥桂
　こゝろの清め柊さす軒　車両
吹風を余處へはやらじ大鳥毛　吏喬
　乗物脇の袖が小さい　大路
尻むける下座に両部の恋衣　徐道
　児性上りを祢宜へ入聟　去鳳
ちょい〳〵と棹を遣ひし早瀬川　呼山
　位高ふ生れ商ひがない　炉艮
唐鳥の羽は美しう着こなして　桃好
　さき囃子先横たをる音　東呉

金屏風絞ッた幕の真向ふに　如藍
　狆から門をはいる本陣　桑枝
旅へ出て来ませ〳〵と春の風　一羽
　二の替りから月と連立　沖三
花衣着て花衣縫ふて居る　笛十
　倭国の手柄仮名に和らぎ　輦仕
三初雪の眺めごゝろは五七寸　杜衡
　今日は隙欤と留る碁の友　為室
拍子やう下手な咄しを聞功者　烏樽
　つかでも鐘の名こそ高砂　何執
ふせやほど松の冨貴の男ぶり　汶義
　外で見て来る馬士の夢　懐河
朝は鵜を塒へ寐させて肘枕　可静
　たけた胡瓜に錦木の色　貫二
二三人祇園氏子の出立はへ　常楽
　空へ砂盆の入さ見て居る　兎立
夕月は浅黄の雲にうつろひて　袖嵐
　初瀬六代の机洗はせ　呉中
孫連て必ござれ茸狩に　魯谷
　放し目貫の光る壷笠　旭山
ウ写さる、けふを曠とや着かざりて　湖月
　蚊の多いのが嶋原の難　晨候
沢泻に鼬の狂ふ作り道　鷺十

　無言の尼の軽げなる笈　布聲
連歌堂施主の家さへ絶にけり　燕逸
　御物袋のなれた結びめ　一笑
象牙蓋肥後瓢簞に天さがり　柳風
　国の末にはいちはやき品　斗牛
横町へ松の位の落し水　皐鶴
　醒た緋無垢の紅葉重ねる　哥声
二夜月大雪降ッて空晴た　月千
　画て久しき画馬へ立寄　如月
七回り越れば遅き花も咲　松春子
　樟脳嗅き去年の言傳　十八九
ナ暖かさ銀魚の獅子尾振乱だれ　是候
　師匠の睚り舞の手に付　左定
胸騒ぎ芝居の夜半面白き　不石
　若い間の金があぶない　芽〻
いつの世に被へうつす段熨斗目　如扇
　二人時雨て太融寺出る　右律
湯奴に絹ごし豆腐なまぬるき　其雄
　熊の昼寝は油断ならぬぞ　嘉重
桃李花の鉾に桜をかきさがし　几盦
　羽織重ねる貝よせの風　芦笋
駒鳥は野こへ山越大名へ　芦川
　堅い老醫の扶持わづかなる　菊圃

涼しさは月を宿せる臥龍竹　涼花
　撫子会の気侭八百　貞峨
侍(ウ)に先祖訪るゝ崩し焚　洒郎
宇佐美久津美に名の高き後家　有角
細ひ指もつれる筆のはしり書　岳川
　東行西行恋のぬけ道　律河
中墨は直にけづらん掟にて　取角
　肌ぬぐ癖の止ぬ早蕨　巴声
さればこそ不断桜も花の春　子彬子
　舞ふて納る千寿万歳　筆
眼(余)の届く内に見えたる八重霞　芙蓉
　天にも地にも鳥が囀る　佳卵

（舞雪編『老木芽』上）

十一　「稀人や」　（歌仙　明和七年）

七十賀

稀人や若むらさきの古金襴　周禾
　桜見さいな唐にない枝　茶雷
鯛拾ひ波霞む袖にはらばふて　漁焉
　ばつてう笠の裏も入れ物　周禾
待合の壁にうつすり月の跡　〃
　生ま照りながら目印の蔦　〃
爰らよし百舌鳥の鵜(ヲトリ)の道具立　小筒の口のこより仕替ん　漁焉
　美しさ雇ひ給仕のこなされず　茶雷
　恋煩ひの親に抱れる　周禾
顔見せが果ると内は被そめ　焉
　翌の謡も神楽所で練る　雷
頼政の芝を破て土竜　禾
　土産の螢竹輿を光らせ　焉
雨後の月船にひつ付渡し銭　〃
　来た状読でもらふ茸番　禾
花の狩妻乞せしもかへらふ歟　雷
　録盗人の鼓つきあひ　〃
大(ナ)礒や遊女の名よせ二枚綴　禾
　切たる指の飛だ盃
又消えて涼しい亭のそれなりに
　うは気念仏が来ると初夜鳴
跡継の松の枝つく一里塚
　馬のあふたる横騎の連
百石が扨は不足の冬籠
　草紙にもかけ嫁の孝行
振袖の今の長さで短さよ
　すゝきの糸の葉末から焦
月影に人の背の越す川はなし
　鯉も機嫌の踊はありや〳〵

先キヘ来て待ば松坂利休箸　禾
くるり一丁朝の切水　雷
郭公金さへ蒔ば聞ける事　焉
碇二挺にうまく夜を寝る　、
かけまくも爰住吉の花の波　舞雪
鳥居を越えし春の寿き　執筆

（舞雪編『老木芽』中）

十二　「芽を出して」　（七十二候　明和七年）

七十二候
祝以五音相通
芽を出して年も師匠の根継哉　几掌
春をちからにひらく枝折戸　舞雪
寄る貝に風が錦を打着せて　張吾
船の釣瓶の音なくも汲　掌
十六夜はすこし遅くて二日かけ　漁焉
寐てよむ状の足は蟷螂　吾
しばらくは鉢の中にも蕣の
市のきをひぞ橋こゆる也
そろ盤のつき物狂ひ手を打て　焉
十二疋づゝ産はあんまり　吾
草双紙貧な嫁入はなかりけり　掌
肩裾かけてほの〳〵の歌　、　焉

杜若五日の軒にたゝん事　吾
薄荷たばこも入梅のむすぼれ　、
津国や裸足暮しの布所　焉
百で死だか箸も捨らず　、
真白なる夕栄もあり泊おんな　掌
風呂のはづかに見えし君様　吾
雛買の心よはくも立戻り　焉
月夜なら曲水もはやらん　掌
里坊の痩地に花を落つかせ　吾
浮雲く思ふ医者の垢ぬけ　、
長持で黒木の烏井楽屋入　掌
卯の刻雨の音たて、降杜鵑花　焉
乙矢などせめて待甲斐さつき山　吾
借りた若衆に我一の鬮　、
御家中の近い他領へかよひ連　焉
二本残りし稀有な線香　、
出嶋にはくろん坊連の宮づかへ　掌
浦の笘家に豕ぞ鳴なる　、
ふく螺にからみし痰を忘れけり　吾
念仏停止も比叡のむら雲　焉
花からの蕎麦の約束冬に成り　、
咽く傍に独かも寐ん　掌
是非聟と月夜には金を追駈る　吾

銚子の秋の濱に積む銭　馬
[二ウ]金[ナ]拳始終はつても勝がよし　掌
籏本摺レの例の悪口　吾
又候や梶原殿に男子出来　吾
婢に持す桜かざゝぬ　掌
弥生にも曇る高雄の日和癖　馬
やつちや恐し鳶飛て魚　掌
転だ馬起す気もなく摑みあひ　馬
一ッ噺にふんどしの恥　、
問丸の月すむ川を前に当　、
嵯峨へ流すは尼の青梨子　吾
踊からの縁は間ぬけのふり合せ　掌
命貫ひに攝家風ふく　吾
堅横に植たる花のつれなくも　掌
けふは柳の絮をぬく空　馬
[三]長刀此春も主とりかねて　馬
早合点なる淀の継橋　掌
来る節李鸚鵡の手前面目も　馬
鎧の包ひ袋樟脳　、
枕絵も花橘の代々を経ぬ　、
大蛇としらで幾夜寐にけり　吾
櫛の歯の占による神隙もなし　掌
石にて切るははつかしの森　掌
手を引た後に丁稚舌を出し　、
またも狸は筆に結る、　吾
学寮に蠣をほしがる雨続き　、
汚すと売てさだめなの雲　馬
達磨忌に月の光りもにらむ程　掌
我は化たと誰もしら炭　吾
[三ウ]宇治川の茶屋の亭主に大納言　馬
尻馬に打乗て誹れり　掌
蝿将棊灯の下闇へ持代り　吾
脱て元直にならぬ加賀簑　馬
とれ退ケと掛物しまふひとへ帯　掌
すはや御成りと狗を掃出す　掌
花守がかはらぬ顔の耳ひかん　吾
賀ひの莚すみれ蒲公　馬
執筆

（舞雪編『老木芽』下）

十三　「子たる人」　（歌仙　安永二年）
疎竹庵主の還暦を祝し侍りて
子たる人この子をいはへかゞみ餅　茶雷
生れ翁がぬけた齒固　青魚
寒ひのにちいさな鳳巾のひらめいて　三冬
於下の太鼓天気てんから　漁焉
船よする岸は宿呼ぶ月ゆふべ　、

秋の袷はかさねても着る　三冬
おしろいの花には紅脂を解あはせ　、
恋煩ひに伽のうつそり　漁焉
小妣泊瀬の供をねがふなる　、
長者柱は慈悲の根を継　三冬
ひそ〳〵と御金つまりに山伐リて　、
石地に矢背の早苗みじかき　漁焉
馬士の若ひに似せぬ和らかさ　三冬
先へ寐入て蒲団盗まれ　、
大よせに関のとざしを抜おふせ　ミふゆ
腐った腹へ秋田屋の水　漁焉
花ははな月には月にうかれ神　三冬
見物左衛門春惜むらん　、
西山の霞む三里を雪踏がけ　漁焉
鐘ほそ〳〵と日和あふなき　、
適の蜘のふるまひ庚申　ミふゆ
銭で借されてこまる欠落　漁焉
ひりかける小笹が下は谷深み　、
高野の年薪冬を待かね　三冬
鉄炮も免許の家の烽分限　漁焉
廿六夜は軟弓の影　、
別れ路をお歌なんど、遅なはり　ミふゆ
針目も艶ふおちくぼの君　漁焉

塩魚のしほなれ薦も身にあはず　三冬
宿から誘ふ灘の夜芝居　、
あれほどの石を鳥井に切こなげ　漁焉
軍破れて雲落る原　、
京へ出る田舎座頭の一繋ぎ　三冬
汲てはこぼす鮎を笠伏せ　、
梅をこそむべこそ花の新謡　漁焉
土筆も袴たけなはに脱　三冬

（諸号編『桑蓬集』）

十四　「いざさらば」　（歌仙　安永二年）

同生同死は格別の知己なり
齢を貧るは老の癖也

いざさらば松と鶴との引こぐら　一炊庵万翁
互に偸む桃もまた花　青魚
樋をぬけば三日の遊びに波よせて　漁焉
腰かけながらしばし寐なゝん　翁
銀の蟾は毛彫にありぬべき　魚
穂蓼しだる、赤土の岸　焉
宿とりはあの野、宮で別れこし　翁
似たりの櫛の照の自由さ　魚
聞出して親は安堵の忍ぶ恋　焉
鑷のかねは早うぬくもる　翁

兀山を雪にした嘘にくからで
　遠ひ韻字を取てぎちかは
舩どめの伏見の昼は梦なれや
　寺号はしらずさぼてんの寺
ほれ〳〵と花にむかひて茶を啜り
　蚕どころは蝶もたくさん
弥生尽月があろなら只置かじ
　三のかはりも見ねば気が、り
[二]今となり憑む揚屋も雨もりて
　乳母が方まで女房の文
調度にはきついとんつの須磨の陣
　花からこぼす昼顔の砂
白酒の猪口をならべて松の風
　鎌抛る乞食〳〵でもなし
夕月に埃もたてぬ柴問屋
　一日転げて雲井とゞろく
鹿笛と思ひの外の盗人等
　祭礼前に衆徒の質請
悪縁は牛王の灰に繋がれて
　お尻(イト)を添へて沈香を売
[ウ]馬の上紅絹のはつちもぬるからず
　関役人も木曽の山猿
間口とは奥行よほど懸造」

、　すり鉢の樹も春は来にけり
魚　花の中でも立物は遅く咲く
　　二ッ秀る芦の葉の角
翁　　　　　　　　　（諸号編『桑蓬集』）
焉

十五　「よしみの竹田」　（付合　安永八年）
翁　　よしみの竹田過がてにする　　瑚璉
魚　　難波人芦火たく屋をしのぶにも
焉　　　　　　　　　（『秋山記』）
、

翁　十六　「まれ人に」　（付合　寛政三年）
焉　　まれ人にすかさずのばす爪しあれば
翁　　またあふ坂もあらじとおもひて
、　　　　　　　　　（『癇癖談』下）
焉

十七　「鶏を」　（付合　享和二年）
、　　前句は忘れたが
翁　　鶏をながめて休む鳥さみし
焉　　　　　　　　　（『四季風流絵巻』）
翁

　連句典拠書目
1、一炊庵紹簾編『歳旦帖』　横本一冊。宝暦三年刊。個人蔵。
2、茶雷編『俳諧十六日』半紙本一冊。紹簾序。南陽主人几掌跋。

十南斎白羽追善集（五月十六日没）。宝暦五年刊。綿屋文庫蔵。

3、一炊庵紹簾編『うたゝね』　半紙本四巻四冊。宝暦五年二月君子窩主人序。宝暦乙亥春二月紹簾自跋。紹簾八十賀集。宝暦五年八月より十一月下旬に至る几掌の東国紀行を収め、刊行は翌年春か。大阪女子大学図書館山崎文庫蔵。

4、几圭庵宋是編『はなしあいて』　半紙本二冊。几圭薙髪記念集。上巻、七十叟机墨庵宋屋序。宝暦丁丑冬嵐山下陳人雅因序。下巻、宝暦戊寅孟夏自序。霜月十五日付几圭宛几掌書簡を跋とする。京都平野屋善兵衛刊。綿屋文庫蔵。

5、亜覧編『亀文追善集』（仮題）　半紙本一冊。自序。叮寧堂刊。宝暦九年頃の刊。綿屋文庫蔵。

6、舞雪編『雪達摩』　半紙本一冊。一炊庵紹簾一周忌追善集。扶酴榭序。綿屋文庫蔵。

7、舞雪編『さし柳』　半紙本二冊。一炊庵紹簾三周忌追善集。辛未十月自序。宝暦十三辛未十月十四日二条庵笛十跋。明和三年（推定）刊。上巻、富山県立図書館志田文庫蔵。下巻、個人蔵。

8、舞雪編『老木芽』　半紙本三冊。舞雪古稀記念集。浪速橋顕樗人序。本農舎広瀬布由跋。柿衛文庫蔵。

9、諸号編『桑蓬集』　半紙本一冊。勝部青魚六十初度賀集。安永癸巳夏六月之吉南畝吉敬序。自跋。安永第二癸巳秋摂今津彫工伊藤為次郎刊。大阪女子大学図書館山崎文庫蔵。

10、秋成著「秋山記」。安永八年成る。『藤簍冊子三』所収。

11、秋成著『癇癖談』下　寛政三年成る。文政五年刊。

12、文鳳画・秋成賛『四季風流絵巻』自筆。巻子、一巻。京都染色会館蔵。